

沖繩だより

牧野 静子

一、沖繩の風土記より — 石垣島（石垣市）移民の島 —

二百年前の明和八年（一七七二）に襲った大津波のために、石垣島は全滅に近い打撃を受けた。このとき全琉にわたって約一時間の地震があったが、地震がやむと、海上から雷鳴にも似た轟音が響きわたった。つづいて、大干潮が発生し、その後間もなく、三回にわたって黒雲のような大津波が怒濤の如く押し寄せた。被害——約三万人の島民のうち、三分の一が溺死、全潰部落八カ所、半潰部落七カ所。流出家屋二千余り、浸水家屋一千余りと記録されている。石垣島における明和大津波の恐ろしさを如実に物語っている。

かつて、石垣島はマラリアの島でもあった。苦悩に満ちた移民と開墾も、マラリアのために、部落全体が滅亡していった。いままなお各所に見られる廃村の跡が、その凄絶さをなまなましくとどめている。ところどころに点在する生活用具が、雨にうたれて風

化しており、朽ち果てた柱が、さびしげに住居跡を示している。耕された原野も、再びもとの姿に戻っている。言い知れぬ悲しみ、うたれる情景である。むかし、この地に人々が働き、もだえ苦しみ、嘆き悲しんだのである。僅かばかり残されている石垣のすき間から、当時の人々の叫びがもれてくるようである。

石垣島は移民の島である。犯罪者として、あるいは強制移民として、部落をつくり、耕地を開墾してきた。現在でも、裏石垣方面では部落単位の生活をしている。歴史を共有することは、社会を構成するための必須な条件であるが、ここでは歴史、制度、経済、行事、宗教、文化などいずれも僅かずつれている。

開拓の苦しみに加えて、津波やマラリアによる大被害が石垣島民の性格をどのように揺り動かしたかは、想像に難くない。ひたすらに教育に力を注ぎ、子々孫々を島から脱出させることに希望を抱いたとしても、当然のこととして受けとめられる。それがゆえに石垣島では、筆一本が財産だといわれ、異常なまでに教育に

熱心である。雄大な自然と豊穡な亜熱帯植物群、それに素朴で特異な民俗芸能に魅せられて、今では年ごとに観光客が増加している。悲惨な過去がまるで幻のように消えてしまった。米原のノヤシ群落、荒川のカンヒザクラ自生地、平久保のヤヤマシタン、宮良川のヒルギ林などが国の文化財に指定された。

なかでも川平貝塚一帯の景観は素晴らしいの一語に尽きる。川平湾は、リーフが自然の防波堤となつて、波が静かに行んでいる。

強烈な太陽の光で川底の砂が緑に輝き、エメラルドのじゅうたんを敷きつめたように、靈驗なふん囲気をもたらしている。タヒチ島を中心とするポリネシア諸島にボラボラという島があり、ここでは水上にあつても空中に浮かんでいるようで、あたかも天に登つていような気持ちに誘われるが、川平湾の美しさは、ボラボラの海に優るとも劣らない。また川平湾は、黒真珠の産地として有名である。黒真珠の母貝はクロチョウ貝といつて、世界的にはかなり広く分布しているが、黒真珠ができる条件として、川平湾はその北限にあたっている。黒真珠は、クロチョウ貝が口を開いたときに、夜露が落ちてつくられたといわれ、このような伝説が川平湾をより一層聖域化している。川平湾をはじめ、豊かな観光資源に恵まれた石垣島には、将来の飛躍的發展が約束されている。沖縄本島から四五〇キロも離れており、相当の地理的ハンデ

ィキャップを背負っているにもかかわらず、まれにみる速さで進展を続けている。八重山経済のパロメーターともいえる石垣港の取扱貨物は、優に二十万トンを超え、二千トン級の船舶の接岸能力も可能になった。市街も近代的な住宅や店舗が建ち並び、都市化の構想が着々と進行している。好むと好まざるとにかかわらず、脱古琉球をはかっている。

近代化が微妙に古琉球を圧迫し、新興都市としての歯車が回りはじめた。移民の島としての部落単位の社会組織がいま崩壊しようとしている。石垣市には三十九部落があり、それらはそれぞれに違った個性をもっている。一つの行政単位としては、あまりにも広い地域とあまりにも異質な文化を同時に抱えているが、近代化の波は容赦なく押し寄せ、石垣島を一つの器に包もうとしている。数々の話題を提供した宮良と白保の対立、孤立した裏石垣の文化、それらはいま古い土壌の下に埋蔵されている。いま石垣島は新しいイメージの島に生まれかわろうとして未来に向かって大きくはばたいている。

二、石垣市の幼児教育

就学前の幼児を幼稚園に入園させ、適当なる環境を与えてその心身の発達を助長するように保育することは、「三つ児の魂百ま

で」という言葉の通り教育の基礎段階として最も重要なことである。しかし、今より三十年前のこと、その当時はややもすると、

幼児の教育は大方家庭まかせとなり軽視されがちであった。しかし終戦後民主的文化社会への一大転換により、人権は尊重せられ、幼児教育の目標や内容制度の一大変革につれ、幼児教育の施設はますます重要視され、各部落もしくは学区等において幼稚園が設置された。本園の設立以前は、幼児保育機関として石垣市内にただ一つ、やえやま幼稚園があるのみで、一般民の認識も薄く、幼稚園は単に生活にゆとりのある家庭に属するものであるような感を抱く者が多く、したがって幼稚園設立当時は、区域民にこの事業の理解と協力を高めることは容易なことではなく、この経営はいたって困難なことであった。

しかし初代園長初め職員有志各位とともにあらゆる困難を克服し、多大な犠牲を払って今日に至った。現在では石垣市では市立幼稚園十三園と私立幼稚園五園が設立された。当園の創立は大平洋戦争終結後の昭和二十一年一月二十五日であって、戦災による住生活の苦悩、食糧飢饉、マラリヤの爆発的大流行、医薬品その他の生活物資の欠乏等の結果、人心が極度にすさみ、世道全く混とんとした世相下に設立し、当時の入園児僅か三十名、それが毎年増加して現在では二千九百余名を数える発展をとげた。

三、郷土のわらべうたと民謡

まずうたって楽しいものは詩の内容がすぐれたもの、そして沖繩の音楽を総合的見地からとらえられるものを結びつけた沖繩のわらべうたは非常にうつくしく、誰が口ずさんでも親しめるものである。この五年間ぐらいわらべうたを実践家を通して勉強し、カリキュラムにとりいれ、子どもたちと一緒に楽しくうたっている。色彩ゆたかで豊富な内容をもった沖繩のわらべうたは、限りない美しいうたではあるが、現代社会の大人たちは、あまりにも生活がせわしなく機械的で、子どもを眺める余裕すらないのが実状のようである。

私たちはわらべうたの指導を通して、祖先の子どもに対する愛情、子どもたちの言葉の美しさややさしさ、音楽動作の楽しさをはだで感じとることができる。指導しているうちに、ひとりひとりの子ども表情、顔、気持ちをよく見つけてはたらきかけたことは、人間の信頼、思考をも高めていくのに大切なことだと思ふ。これまで実践してみても、わらべうたで子どもたちがどう変わったかという点、教師と子どもの一対一のつながりができたこと。子どもの中からもしぐさ遊びが出てくるようになったこと。一斉保育の中で目だたない子が生き生きとしてきたこと。グルー

プ遊びからはみだしがちな子どもが、仲間入りをし、あきがなく
 続けてやっていることができるようになった、などである。お遊
 戯発表会にも、わらべうたなどを発表し、リズム楽器遊びにも民
 謡をとり入れると、子どもたちはとても興味関心をもって喜んで
 楽しもうたう。参観者のお年寄りの方には、なつかしいうただと
 感激し好評である。これからも、もっと実践を大切にして、わら
 べうたの研究を深めていきたいと思う。指導の立場として、でき
 るだけ勉強をし、きちっとした姿勢で子どもたちに伝えることが
 大切ではなからうか。これまで子どもたちに親しまれたうたの中
 から、ごくわずか、八重山の石垣島のわらべうたを紹介いたしま
 す。

◎雨

(1) アーメーマーヤ フイタポーンナ

ティダーマーヤ アガリタポリー

(解) 雨こんこよ 降りやんで

お天あまとさまよ 上あとくれ

(2) アーメーマーヨ フイタポリー

ティダーマーヤ アガリタポーンナ

(解) 雨こんこよ 降ふってくれ

おてんとさまよ 照りやんで

◎数え歌(お手玉のうた)

イッチク タッチク ジュニガ シーカー ハーリン トーマ
 ハーリガ ユイサー

(解) 一二三四五六七八九十

註 明治九年石垣島にマニラ人六十四人漂流し、海岸に仮居し
 て久しく滞在していたことがあって、子どもたちと仲よ
 くなって教えたものだという。私たちの幼いころは、よくこ
 のうたをうたいながら、サザエのふたでお手玉遊びをし
 た。

◎ じんじんばーれー(ほたる)

ウティリヨー ジンジンパーレ

アガリヨー ジンジンパーレ

(解) おりておいでよ ほたる

舞いあがれよ ほたる

「ジンジン」はほたるの幼児語である

◎ 牛ぎゅうの足あし ぞーれ ぞーれ

ウシヌパン ゴーレ ゴーレ

ウマンヌパン ゴーレ ゴーレ

アキレバ キャン キャン

モーシンガニ チルンガニ ゴッフエ



著者と、みやとり幼稚園の子どもたち

(解) 牛の足 馬の足 しげしげしい中を、モーンガニ(女名) チルンガニ(男名) が来てパッターり出合った。

これは子どもたちが輪になってすわり、足をなげだして数えながら遊ぶうたである。

◎ そーろんがなし(盆の祖霊)

ソーロンガナシ ヌ ウシユマイダー

シヨッコーシラリナ オッタネー

シヨッコーシ オイサバ

トゥサン ナーサンカルイヨリー

(解) お盆祭りのお先祖さま、ようこそおいでになりました。きつとお祭りいたします。遠いかなたのあの世から、きつとお寄りくださいな

(石垣市みやとり幼稚園)



いる世界があつて、周囲の大人の理解や助力の中で、子どもは自分の世界の中に、自分で中心を見出していく。二歳の子どもの中にも、大人にも共通な、そして子どもらしい豊富な世界がある。これは一例であるが、幼児期に子どもは、人生の真実の基本を学んでいくといつてよいと思う。それはおそらく世界中の子どもに共通のことであろう。それには、子どもの生活が自分自身のものとなつていくだけのゆとりがあること、自然にふれることができること、他人のまごころにふれることができることは欠くことのできない重要なことであると思う。夏の旅を終えて、あらためて考えさせられたことである。

訂正 五月号60ページ

赤ちゃんのおみそや―教育の中における障害児差別について―は、「教育の中……」の誤りですので訂正いたします。

編集部



沖縄
みやとり幼稚園風景
(25ページ参照)

泥ねんど遊び